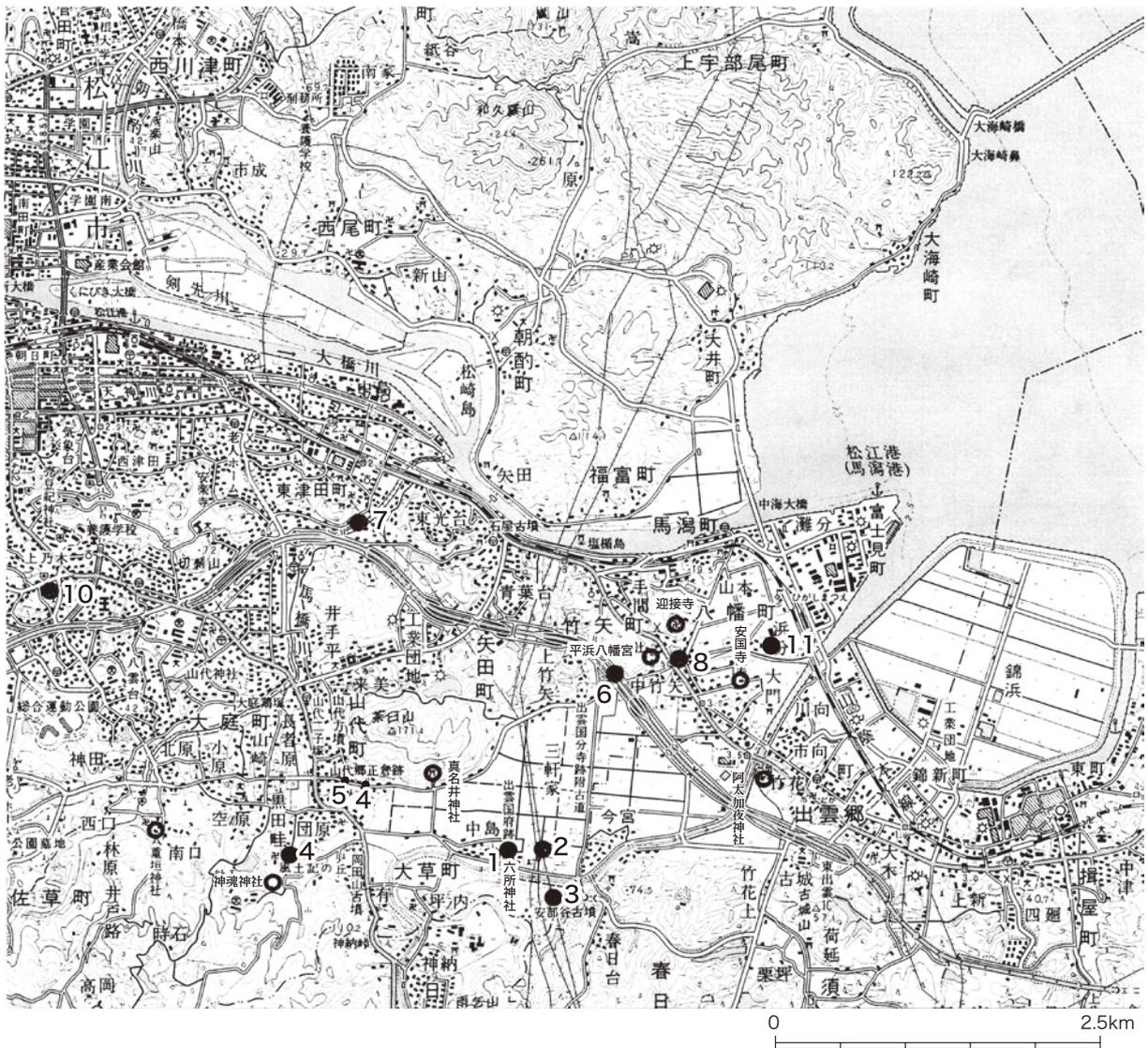


遺跡から見た出雲府中

西尾克己・廣江耕史

1. 古代の国府から出雲府中へ

古代の出雲国府には、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、国庁、意宇郡家、意宇軍団、黒田驛の四機関があり、意宇郡大草郷の同じ場所に存在していたとされる。これらの機関については、松江市大草町にある六所神社の周辺に比定され、昭和43年から発掘調査が実施されてきた。その結果、国庁の政庁や国司館などの建物跡をはじめ、道路跡や井戸跡等の遺構が多く検出され、遺物としては奈良時代から平安時代までの土器や瓦類などが大量に出土している。⁽¹⁾しかし、10世紀後半以降になると、遺構、遺物とも減少してくる。また、各役所や役人の屋敷地も、意宇平野とその周辺部の広い範囲に分



1. 出雲国府跡
2. 大屋敷遺跡
3. 天満谷遺跡
4. 出雲国造館跡
5. 寺の前遺跡
6. 中竹矢遺跡
7. 石台遺跡
8. 的場遺跡
9. 小無田II遺跡
10. 乃木長廻遺跡
11. 浜分II遺跡

図1 出雲府中関連遺跡と社寺位置図

散していったと考えられる。その背景には、律令体制の変質に伴う国府機能の変化が想定される。(2)

奈良時代から平安時代前期の国府は、郡家を含む合同庁舎の様相をもち、意宇川沿いの微高地に存在していた。しかし、平安時代中頃の10世紀後半から11世紀前半にかけての建物などの遺構が、この場所ではほとんど検出されていない。また、遺物の出土量も僅かである。全国的にも、平安時代以降の国府の実態についてはよく分かっていない。

さて、古代末から中世にかけての国府は「府中」と呼ばれ、全国各地に地名として残っている。文献史料からは、出雲府中には留守所、田所、税所、案主所、公文所などの役所が存在したとされる。また、府中域には国内神社を統括した総社をはじめとする神社や寺院、さらには大橋川沿いの港も含んでいた。(3) これらの遺跡や現在まで続く神社、および府中に関係する地名は、現在の意宇平野周辺部の松江市大庭町、山代町、大草町、竹矢町、八幡町、東出雲町出雲郷一带に点在している。

2. 出雲府中域の役所と屋敷地

出雲府中の範囲は大草郷、山代郷、竹矢郷を含む広範に及び、これまでの発掘調査において、国衙の役所跡や在庁官人と呼ばれた役人の屋敷に関わる遺跡などが少しずつ分かり始めている。その手がかりは、中国製の白磁や青磁、さらには国内各地で生産された陶器などの遺物の存在である。特に、中国の陶磁器は一般集落での出土数は限られるが、役所や寺院、館などの遺跡では多く認められる。陶磁器が多数出土する遺跡としては、大草町の出雲国府跡、天満谷遺跡、大庭町の出雲国造館跡、竹矢町の中竹矢遺跡、東津田町の石台遺跡などが挙げられる。出雲府中では、平安時代後半の11世紀後半から12世紀になると遺構や遺物が多く確認されている。(4)

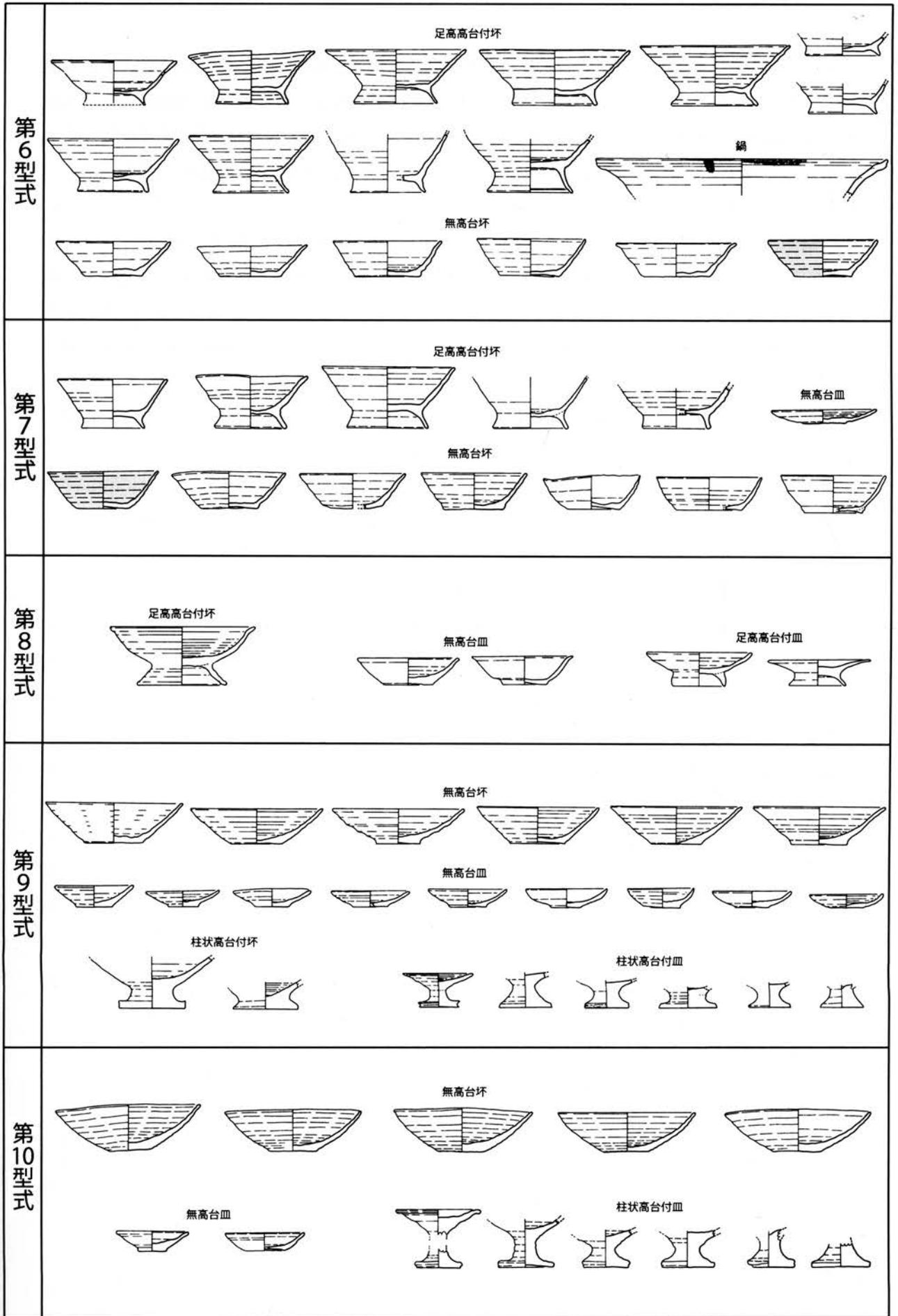
(1) 出雲国府跡（大草町）

出雲国府跡では、遺跡の北東部にあたる日岸田地区^{ひがんで}を中心として、掘立柱建物跡3棟が検出され、陶磁器を中心に遺物も多くなる。この地区の西側では南北道路も存在しており、検出されている建物跡の中には、桁行2間(3.7m)、梁行き3間以上で、二方に庇をもつ中心的な建物も存在する。遺物の陶磁器も他の遺跡と比較しても質量とも突出し、また、中国の青白磁や陶器の壺、盤などの特殊品も混じっ

表1 出雲国府跡遺構遺物変遷一覧図

年代	土器型式	出雲国府	六所脇地区	宮の後地区	大舎原地区	日岸田地区	樋ノ口地区
7世紀後葉	第1型式	I期	前身官衙	前身官衙	—	—	—
8世紀第1四半期	第2型式	II-1期	政庁カ (四面廂付建物)	曹司 (掘立柱建物、区画溝、木簡、墨書、玉作)	文書、工房、祭祀 (掘立柱建物、区画溝、祭祀土坑、墨書、玉作)	漆工房 (総柱建物、区画溝、漆、玉作)	金属器工房カ (竪穴、掘立、金属器)
8世紀第2四半期	第3型式	II-2期					—
8世紀第3四半期	第4型式	III-1期	政庁 (四面廂付建物)	曹司 (掘立柱建物、区画溝、木簡、墨書)	国司館 (礎石、掘立柱建物、区画溝、木簡、墨書)	(掘立柱建物、区画溝、緑釉陶器)	—
8世紀第4四半期		III-2期					—
9世紀前葉	第5型式	—	—	—	—	—	—
9世紀中葉	第6型式	IV期	(炉跡、土坑、緑釉・灰釉陶器)	(掘立柱建物、緑釉・灰釉陶器)	(礎石建物、溝、井戸、緑釉・灰釉陶器)	(礎石建物、溝、緑釉・灰釉陶器)	—
9世紀後葉							—
10世紀前半	第7型式	—	—	—	—	—	—
10世紀後半	第8型式	V期	—	(井戸、土坑、緑釉陶器)	—	—	—
11世紀前半			—	—	—		
11世紀後半	第9型式	VI期	—	(井戸、貿易陶磁器)	(井戸、柵列、溝)	(掘立柱建物、井戸、貿易陶磁器)	—
12世紀前半			—				—
12世紀後半			第10型式				—

『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡－9 総括編－』より)



土師器

図2 出雲国府跡の土器変遷図(4)(S=1:6)

(『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第210図より転載)

ている。白磁をはじめとする陶磁器は出雲国府跡出土の56鉢を占めており、道路跡に隣接する日岸田地区堂田調査区^{どうでん}が出雲府中を中心とした物資の集積地であったとされる。⁽⁵⁾ 山陰において、大量の中国製陶磁器を出した遺跡としては、石見府中の古市遺跡（浜田市上府町）が知られ、同様な機能を有していたと考えられる。当時、中国製の陶磁器は博多を経由し、瀬戸内や日本海沿岸を介して全国に流通するといわれており、日本海側の様子が分かる事例である。また、「殿」の字が墨で書かれた白磁碗や、役人が使用した硯^{ひ おうぎ}や檜扇、蝙蝠扇^{かわほり おうぎ}も数個分出土している。出雲国府跡一带には、平安後期においても主要な政務を行った役所や国司や在庁官人の屋敷が少なからず残っていたことが窺える。鎌倉時代に入っても役所の機能は残っていたことは、13世紀代の遺物の量や多くの柱穴跡や井戸跡の検出から知れるものの、明確な建物跡が確認されておらず、詳細な様子が把握できていない。⁽⁶⁾

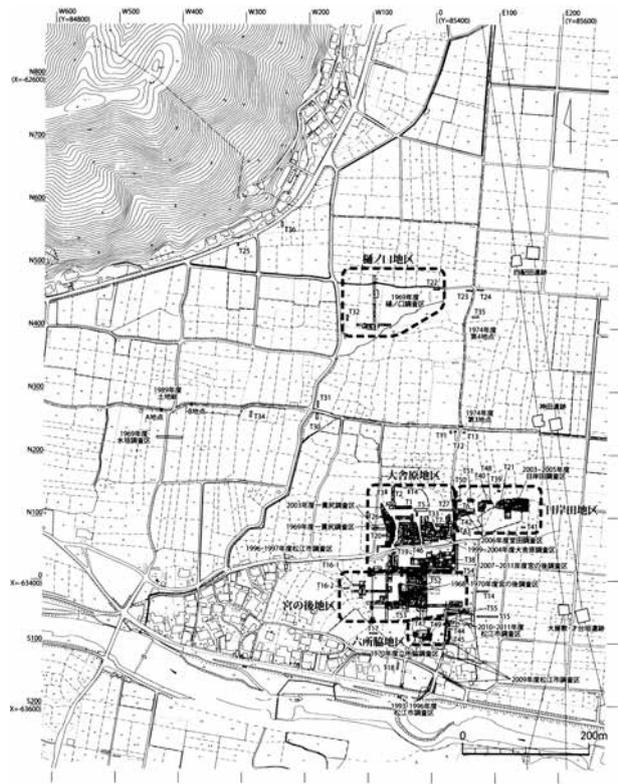


図3 史跡出雲国府跡調査区配置図

(『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第8図より転載)

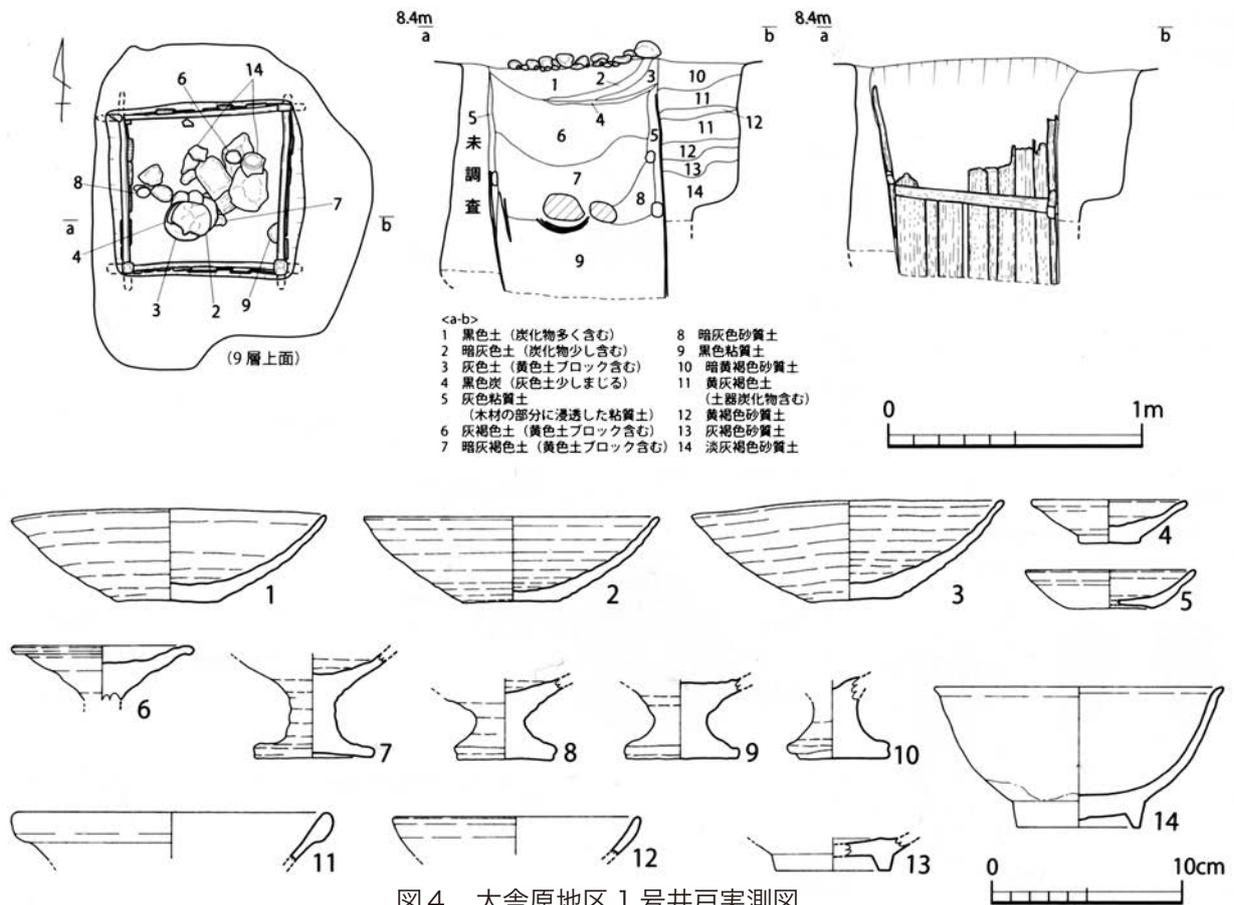


図4 大舎原地区1号井戸実測図

(『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第106図より転載)

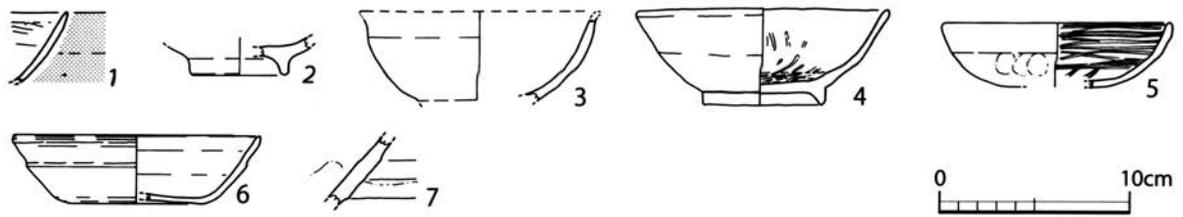


図5 六所脇・宮の後地区出土国産陶器・搬入土器実測図 (S=1:4)
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 215 図より転載)

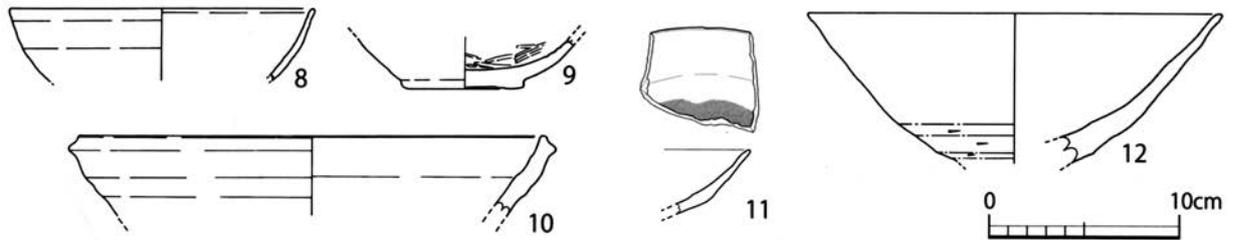


図6 大舎原地区出土国産陶器・搬入土器実測図 (S=1:4)
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 216 図より転載)

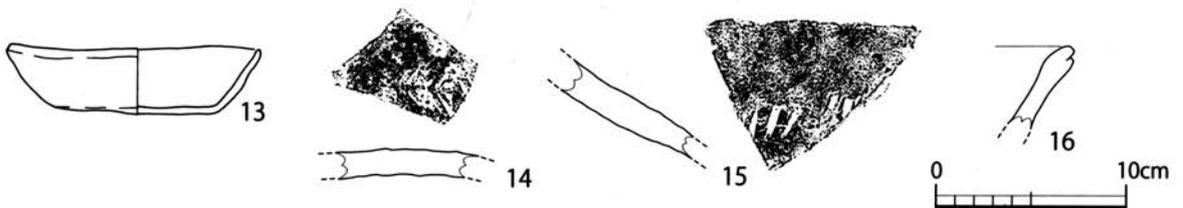


図7 日岸田地区出土国産陶器・搬入土器実測図 (S=1:4)
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 217 図より転載)

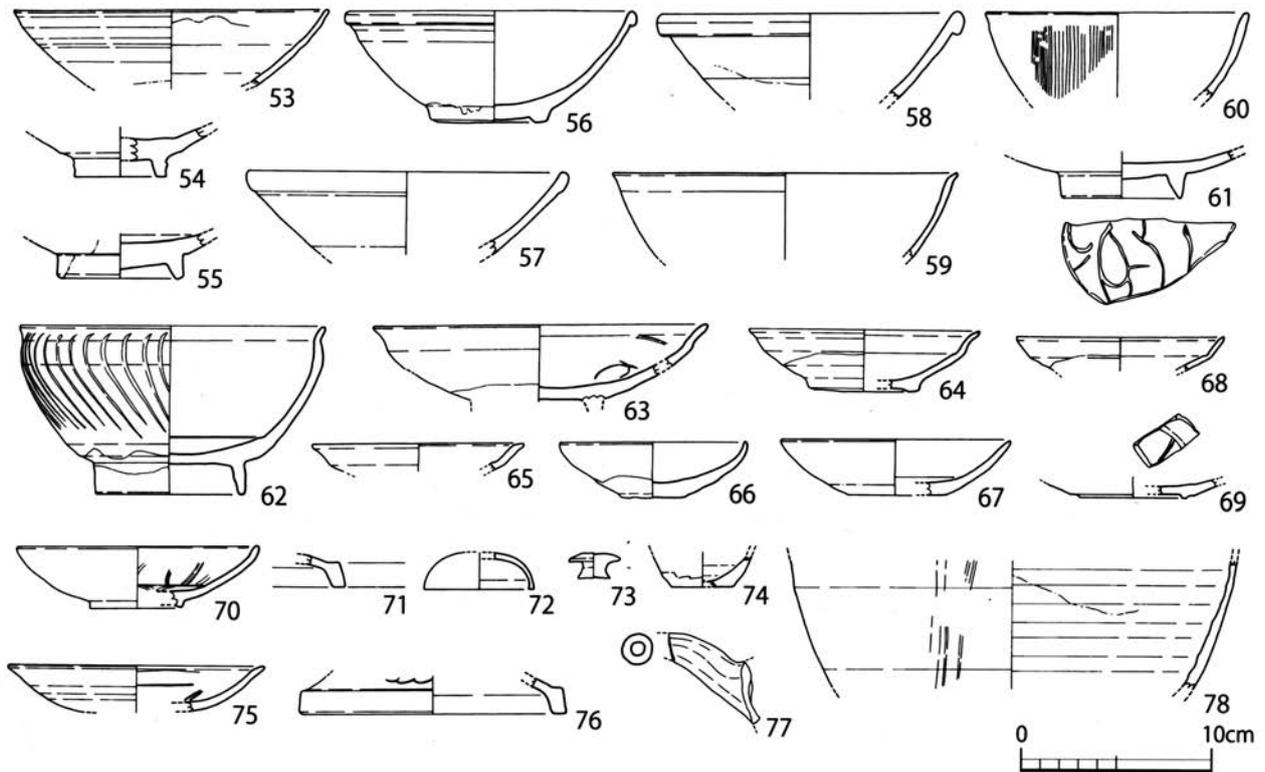


図8 日岸田地区出土貿易陶磁器実測図 (S=1:4)
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 220 図より転載)

(2) 大屋敷遺跡 (大草町)

出雲国府跡上層の遺構面がある場所の東端に位置している。出雲国府とその上層の遺跡群は意宇川北側微高地上に立地している。その微高地は出雲国府跡より東に伸びており、大屋敷遺跡において、中世遺構(建物跡)の東端の広がりを確認している。発掘は、中国電力の鉄塔立替えに伴い実施したものであり、調査範囲は限られていた。遺構としては、掘立柱建物跡2棟、柵列2条で、柱穴も多く確認している。出土遺物としては、中国製の白磁碗Ⅰ類、Ⅳ類、Ⅴ類、青磁碗Ⅰ-5・b類、格子叩き目が付く須恵器甕、備前播鉢、土師器碗・皿がある。下限の時期は13世紀であり、国府上層遺構が意宇川の氾濫により礫層が覆い、遺構が断絶されると同様である。

なお、隣接する才台垣遺跡は意宇川の氾濫により遺構は残っていないが、中世の遺物が出土している。この場所から北側に向けても、農道の付替えの際の調査で、微高地の基盤層と小形の柱穴を確認していることから、国府跡の東には中世の出雲府中に関わる建物が広がっていたと推定される。

(3) 天満谷遺跡 (大草町)

遺跡の位置は出雲国府跡の南東側、意宇川南側の東向きに開く幅20mの谷部である。丘陵斜面に溝を掘り込み、谷を厚さ50cmの盛土で造成を行い、平坦地を作り出している。掘立柱建物跡6棟、柵列2条、溝8本が確認されている。造成土から、越州窯青磁、須恵器の円面硯が出土していることから、国府跡周辺の土も運ばれたと考えられる。谷部の造成後に掘られた溝(SD-01)から白磁碗Ⅳ類、土師器碗、皿、柱状高台皿・杯が出土している。土師器碗の形態から12世紀後半と考えられる。

なお、土師器碗の形態は大きく2分され、体部の立ち上がりが強いものは13世紀前半の時期と考えられる。国内産の陶器として、瀬戸灰釉四耳壺、美濃系山茶碗、常滑壺、甕がみられる。須恵器は、甕の外面に格子状叩き目を有しており、亀山系、勝間田系、在地産が混在している。東播系須恵器鉢も出土している。中国陶磁器としては、白磁碗Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、Ⅸ類、青磁は龍泉窯の劃花文碗、同安窯の碗、蓮弁

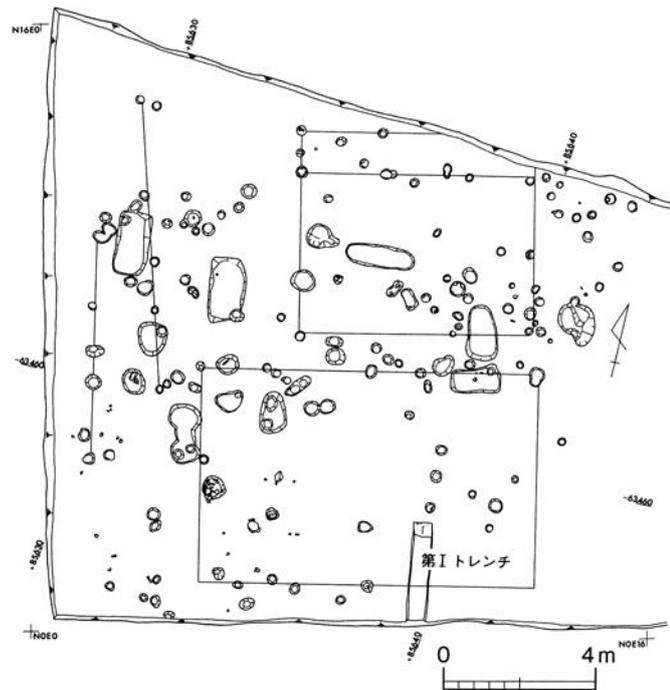


図9 大屋敷遺跡検出遺構実測図 (S=1:200)
(『松江市史』史料編2「考古資料」大屋敷遺跡より転載)

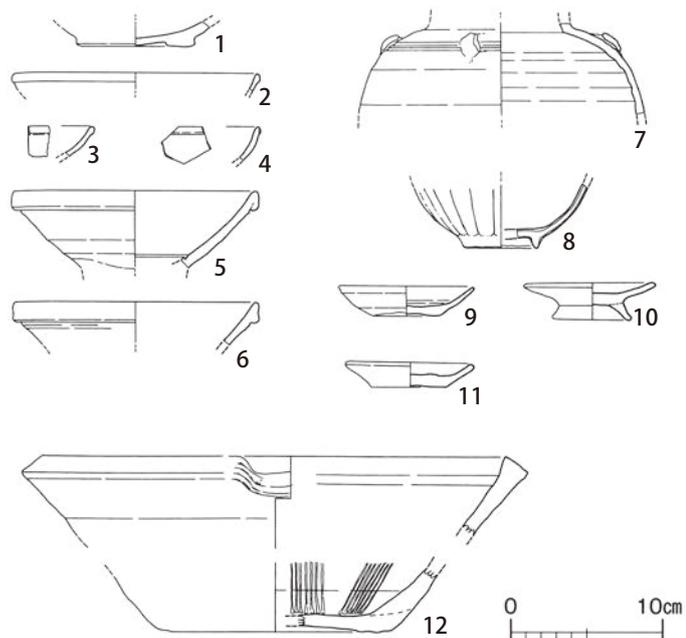


図10 大屋敷遺跡検出遺構実測図 (S=1:5)
(『松江市史』史料編2「考古資料」大屋敷遺跡より転載)

文碗が出土している。

今回、遺物を再度確認したところ、京都系土師器の破片4(個体数3)点が存在した。(表2参照) 出雲国内における中世前期の京都系土師器碗・皿が出土する遺跡が4箇所となった。⁽⁷⁾ 石台遺跡とともに、出雲国府との関連が強いものである。また、位置的にみて、意宇川で分断されているものの、国府上層との関連が極めて強いと考えられ、上層遺構の広がりとして捉えるべき遺跡である。中国製陶磁器類、国内産陶器、須恵器、京都系土師器等の種別の多さもさることながら、遺跡の範囲の狭さに比べ、出土遺物の量が多いことから国府への意宇川を介した水運の起点の一つと考えられよう。



図11 天満谷遺跡遺構検出状況実測図 (S=1:200)
(『松江市史』史料編2「考古資料」天満谷遺跡より転載)

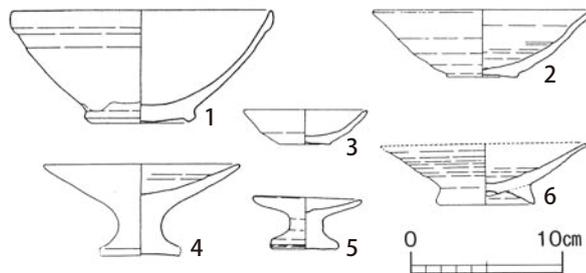


図12 天満谷遺跡出土遺物実測図(1) (S=1:5)
(『松江市史』史料編2「考古資料」天満谷遺跡より転載)

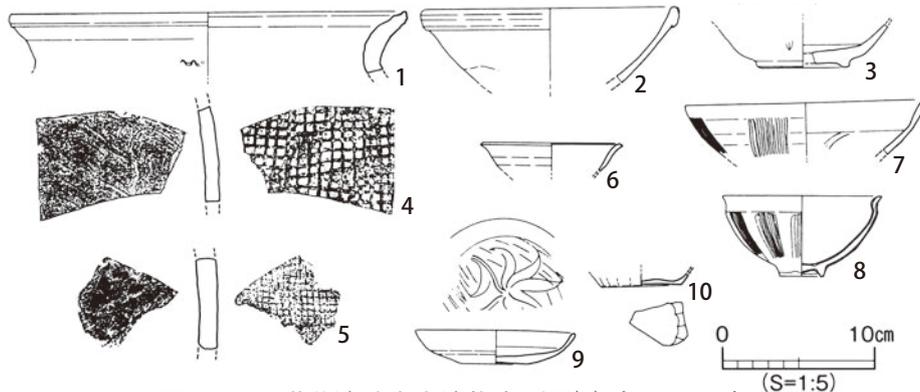


図13 天満谷遺跡出土遺物実測図(2) (S=1:5)
(『松江市史』史料編2「考古資料」天満谷遺跡より転載)

表2 天満谷遺跡出土遺物数量表

種類	器種	破片数	合計	種類	器種	破片数	合計	
中国製品	青磁	碗	越州窯	1	日本製品	備前	甗・壺	
			龍I	4			搦鉢	
			同I	15			その他	
			同II				小計	0
			同III	16		常滑	壺	34
			B0				甗	43
			B1	24		小計	77	
			B2			越前	甗	1
			B3	1			搦鉢	
			B4	6		小計	1	
			C2	1		瓷器系	甗	6
			D				鉢	
			E			小計	6	
		不明	6	瀬戸		碗	10	
	皿・坏	同皿I	2			皿	1	
		同皿III				壺	8	
		龍皿				小計	19	
		稜花皿		中世須恵器		壺	104	
		小杯				甗	168	
		杯IV				鉢	74	
不明			小計		346			
小計			76	土師器	皿	122(京都系4)		
白磁	碗	II	5		碗	8,211		
		IV	70	土鍋	551			
		V	46	柱状高台	921			
		VII		不明(碗・皿)	1,447			
		VIII	1	小計	11,252			
		IX(A)	1	瓦質	鉢	12		
		B・C			搦鉢			
		D			鍋			
		E			火鉢			
	不明			不明				
	皿	IV	1	小計	12			
		VI	1	弥生土器				
		IX	6		土師器(古代)	456		
	E	3	須恵器		2,440			
	不明	18	円面碗		1			
器種不明		123	緑釉陶器		1			
小計		275	灰釉陶器		1			
青花	碗	B			円筒埴輪	1		
		C	1		瓦	3		
		D			小計	2,450		
		E	1		生業関係	石製品	碗	1
		不明				羽口	1	
皿・小杯		砥石	3					
小計		土錘	77					
小計		2	製塩土器	6				
小計		2	その他	2				
褐釉	壺		19	小計	90			
		小計	19	朝鮮王朝	碗	1		
		その他	青磁器台		2	皿		
青白磁合子	1		甗					
青白磁壺梅瓶	3		その他					
小計		6	小計	1				
貿易陶磁器合計			379					

(4) 出雲国造館跡（大庭町）

古代から中世にかけての屋敷としては、大庭町の神魂神社参道沿いの台地上にある出雲国造館跡が挙げられる。60 m四方ほどの畑地に、字名で「土居」が残り、江戸時代から明治初めにかけて北島国造の祭祀時の宿館が存在していたので、この名称が付けられている。発掘調査は台地上と西側の水田部において数次で行われ、遺構としては北側で屋敷を区画する東西の溝跡が検出され、井戸跡も確認されている。また、掘立柱建物に伴う柱跡が多く検出されている。調査面積が限られ、建物の規模や時期は把握されていない。遺物としては、400近い陶磁器片が出土している。その半数が中世前期のもので、平安時代末の中国製白磁が4割弱と多く、中には出土例の少ない白磁の水注や蓋付きの小型容器である合子が混じる。また、鎌倉時代の青磁も1割程ある。さらに、杵築大社の出雲国造が祭祀をする神魂神社が近くに存在することより、国衙の在庁官人でもある出雲氏の屋敷地の可能性が高い。なお、室町時代の遺物はほとんど出土していない。この時期には、屋敷地としては使用されなかったと考えられる。江戸時代に入ると、再びこの地に北島国造の宿館が造られ、明治の初めまで存在していたので、近世陶磁器も多く出土している。(8)

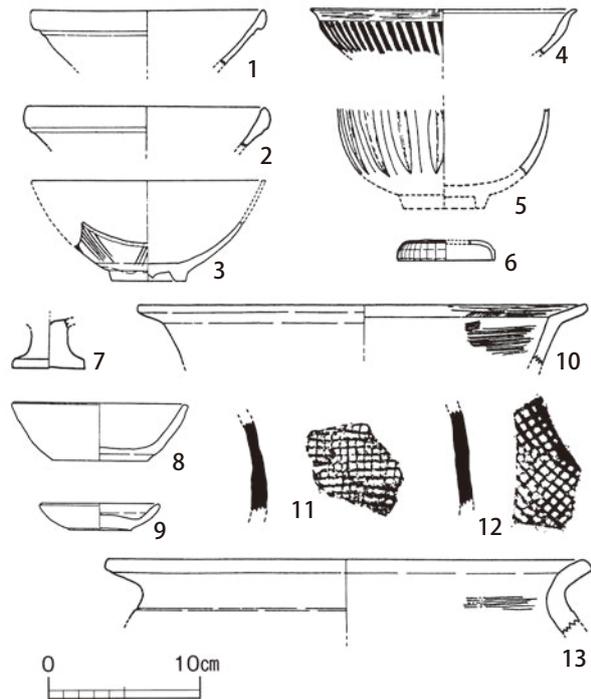
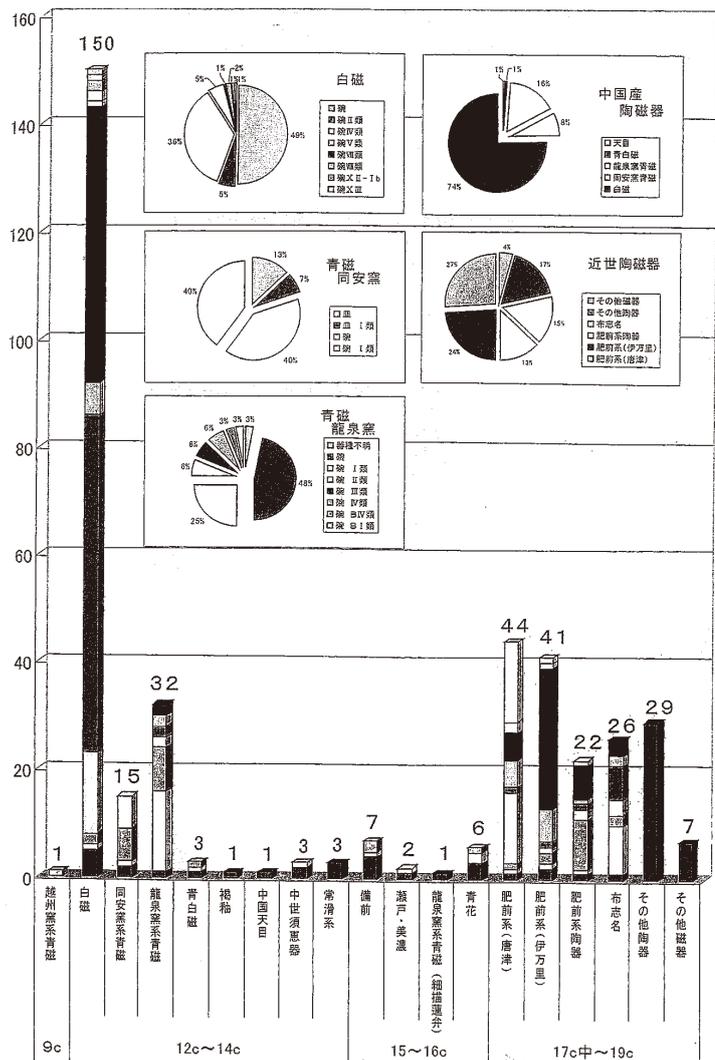


図 14 出雲国造館跡出土遺物実測図 (S=1:5)
 (『松江市史』史料編3「考古資料」「出雲国造館跡」より転載)

(5) 中竹矢遺跡（竹矢町）

小規模な屋敷としては、意宇平野北東の丘陵北側斜面に存在する中竹矢遺跡がある。平坦地が狭く、掘立柱建物跡も数棟確認しただけであった。遺物には12世紀代の中国製白磁の碗や褐釉四耳壺、地元産の土器などが出土している。この遺跡は立地や出土品等から下級役人の住居と推定される。



グラフ 1 出雲国造館跡出土陶磁器分類表
 (『八雲立つ風土記の丘』197より)

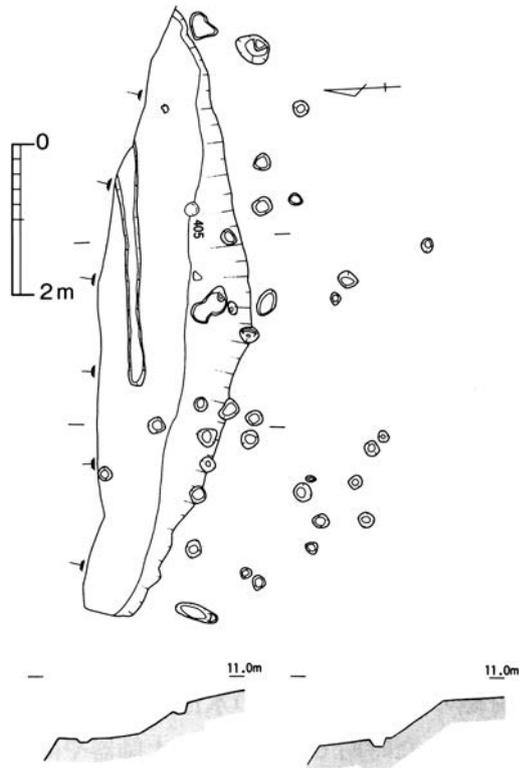


図15 中竹矢遺跡掘立柱建物跡実測図(S=1:100)
 (『松江市史』史料編3「考古資料」中竹矢遺跡より転載)

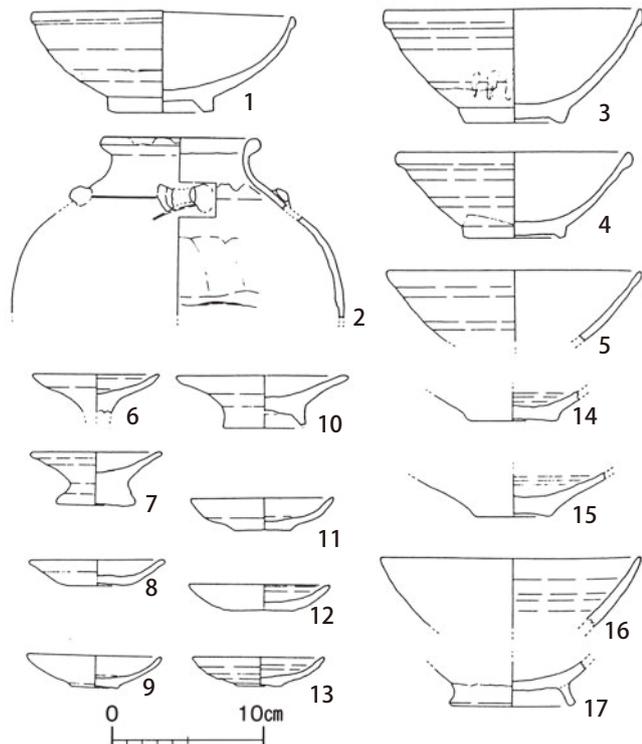


図16 中竹矢遺跡出土遺物実測図(S=1:5)
 (『松江市史』史料編3「考古資料」中竹矢遺跡より転載)

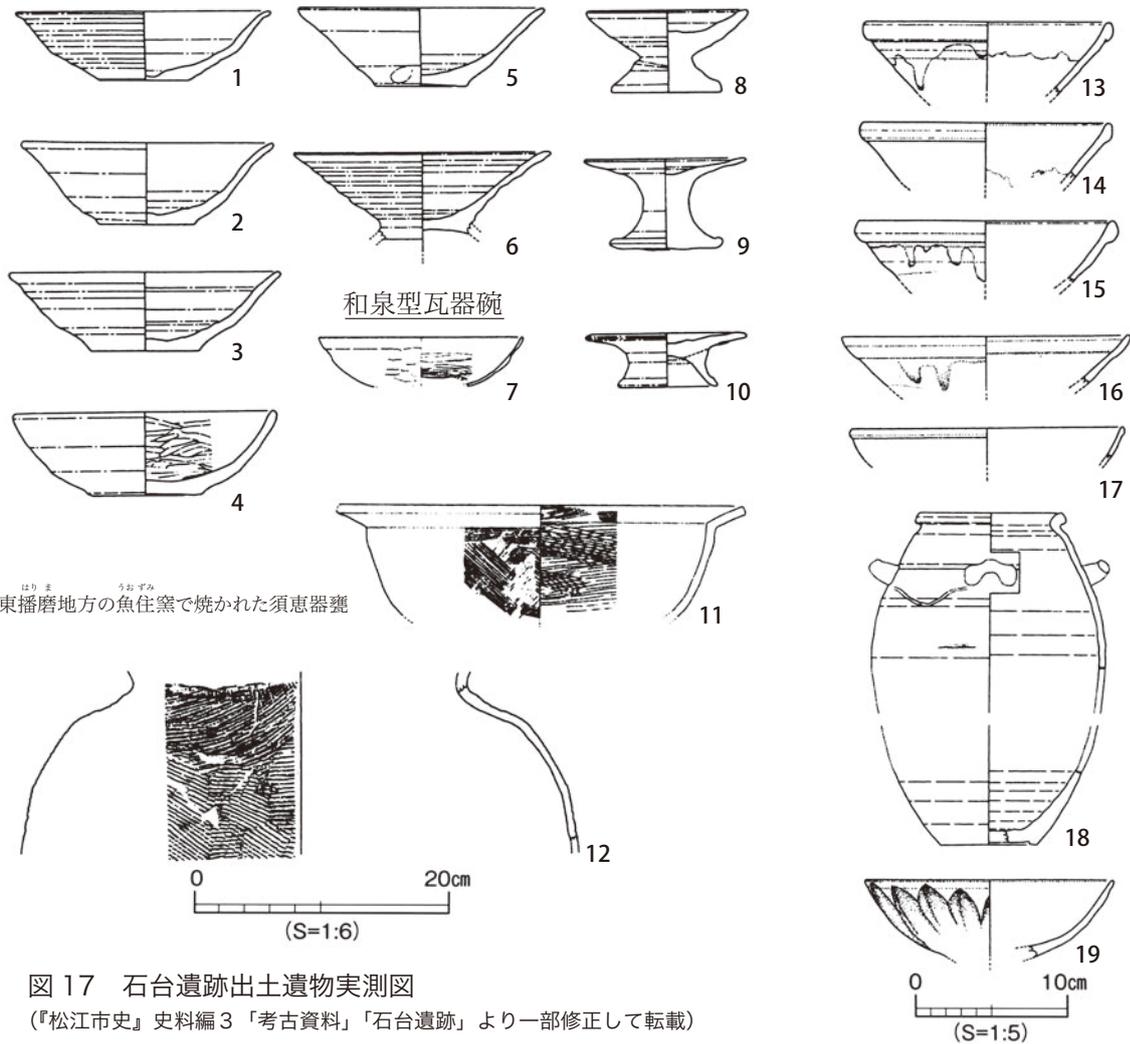


図17 石台遺跡出土遺物実測図
 (『松江市史』史料編3「考古資料」石台遺跡より一部修正して転載)

(6) 石台遺跡（東津田）

神魂神社から北側に流れ、やや東に向きを変えて大橋川に流れる馬橋川の北側斜面に立地した遺跡である。川に流れ込む遺物包含層を確認し、明確な遺構は検出していない。出土した遺物は、中国製陶磁器の越州窯青磁碗、龍泉窯青磁、白磁Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、褐釉陶器壺、東播系須恵器の魚住産甕、和泉型瓦器碗、京都系土師器皿が出土している。遺物の時期は11,12世紀が多くみられる。輸入陶磁器で、越州窯青磁碗の底部が出土しているが、県内でも出雲国府跡などの限られた遺跡から出土するものである。備前、越前等と国内の広域に流通する陶器、東播系須恵器の魚住窯の甕が出土している。今回、出土品の再整理をした結果、当時の輸入陶磁器、国産陶器、須恵器というバラエティーに富んだ遺物が相当量出土していることが知れた。（表3参照）調査した範囲が狭いことを考えると分布密度はかなり高いものである。

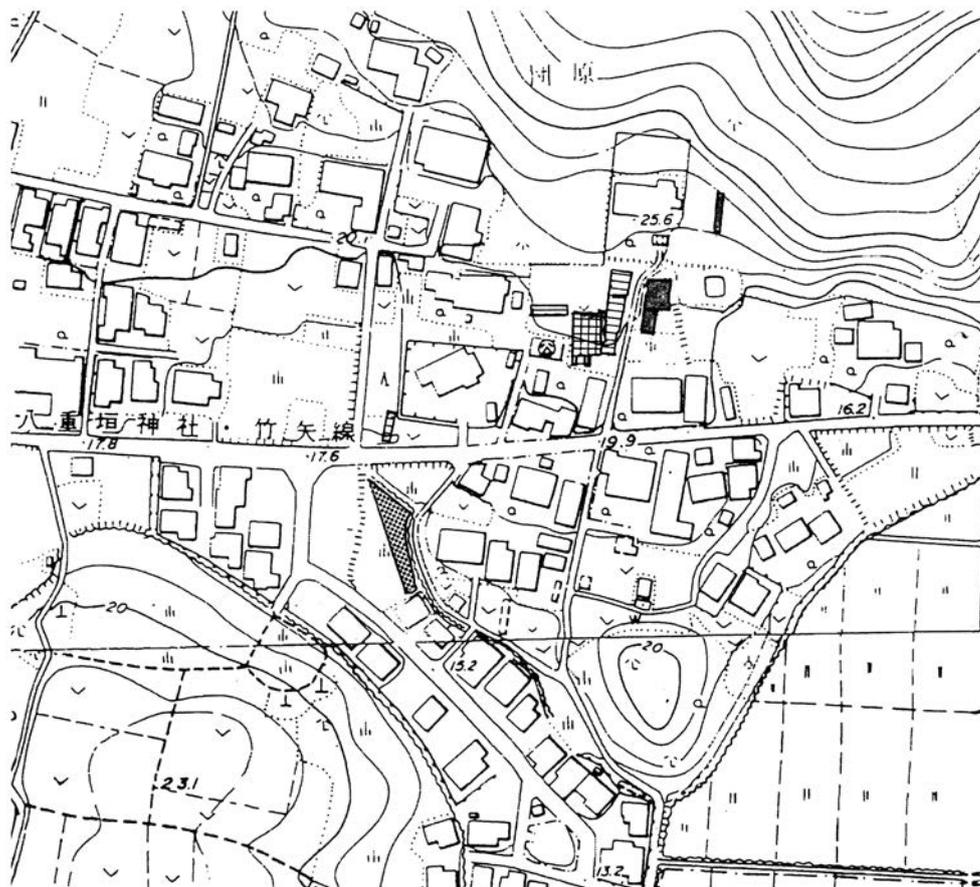
明確な遺構が検出されていないため、遺跡の性格を判断することは困難な状況である。遺跡の立地が大橋川から中海へ通じる馬橋川の河口部であることから、この付近が荷物を陸へ降ろす出雲府中の拠点的な場所で、それを管理する有力者の居館も近くにあったかもしれない。また、遺物の量や中国陶磁器、京都系土師器皿、瓦器碗から、出雲国内では、出雲国府上層と傾向が似ており、関連する遺跡と想定される。

表3 石台遺跡出土遺物数量表

種類	器種	破片数	合計	種類	器種	破片数	合計	
中国製品	青磁	越州窯(Ⅱ2)	1		日本製品	備前	鉢	2
		龍泉Ⅰ	2			小計	2	
		同安	1		中世須恵器	壺	14	
		碗	B1			1	甕(格子)	64
		小計	5			東播系・魚住	1	
	白磁	Ⅱ	3	格子タタキ	5			
		Ⅳ	74	鉢(東播系)	2			
		Ⅴ	20	鉢(在地)	1			
		壺	Ⅲ	4	小計	87		
	小計	101	瓦器碗	和泉型	1			
小計	3	小計		1				
褐釉	壺	3	瓷器系	小計	27			
小計	3	小計		27				
その他	青白磁・皿	1	土師器	皿	154			
	小計	1		碗	6,293			
朝鮮王朝	碗?	1	土鍋	187				
	小計	1	柱状高台	257				
不明陶器	中国?	17	器種不明	4				
	小計	17	京都系	5				
	小計	17	黒色内黒	2				
貿易陶磁器合計		128	小計	6,902				
			瓦質	鍋	1			
			小計	1				
			古代須恵器	甕	429			
				壺	35			
				坏	24			
				小計	488			
			合計	7,636				
			弥生土器	1,264				
			唐津焼・皿	1				
			瓦	1				
			小計	1,266				

(7) 寺の前遺跡 (山代町)

茶臼山の南麓の標高20mの台地縁部に所在する。また、北東側に山代郷南新造院跡(四王寺)が隣接する遺跡で、時期は平安時代末～鎌倉時代である。調査により自然流路跡とその埋土中から中国製の陶磁器が確認された。遺物は12世紀と考えられる白磁碗、皿、陶器壺が中心である。しかし少量であるが、14世紀～16世紀と思われる青磁盤も出土している。南新造院跡からの流れ込みとすれば、新造院や後の四王寺に関連する施設が12世紀代まで存続していたこととなる。



-  昭和59年度 山代郷南新造院(四王寺)跡島根県調査地
-  昭和62年度 //
-  平成5年度 //
-  平成6年度 寺の前遺跡 松江市調査地

図18 寺の前遺跡調査地 位置図(1:2500)
(『寺の前遺跡発掘調査報告書』より、一部修正して転載)

3. 出雲府中の中世墓

中世府中の中世墓としては、遠江府中の一ノ谷遺跡(静岡県磐田市)がよく知られている。見附府中の西北側に葬送の場が存在し、平安時代から近世までの900基近い墓が発見されている。⁽⁹⁾一方、出雲府中において、中世墓はほとんど発見されていない。今のところ、意宇平野の北東部の低丘陵にある的場遺跡(八幡町)と中竹矢遺跡(竹矢町)、茶臼山南西麓の台地上にある小無田II遺跡(大庭町)の三箇所、小規模な墓が確認されているに過ぎない。

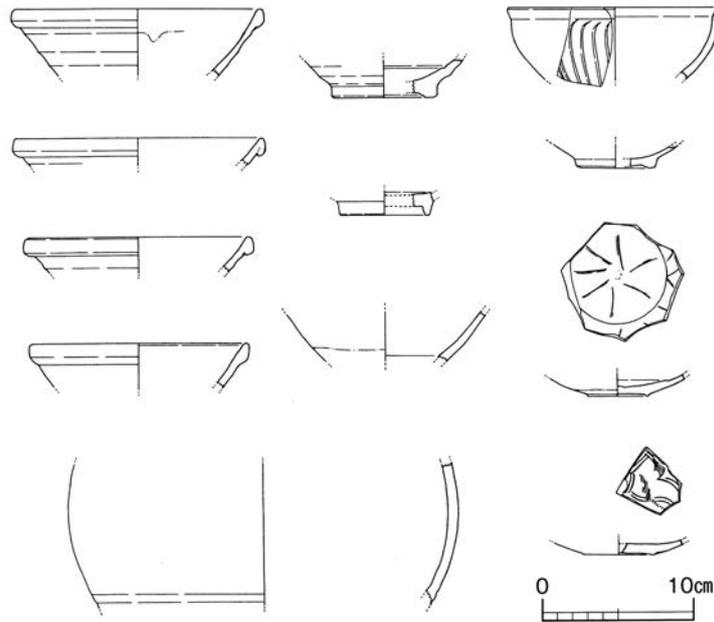


図 19 寺の前遺跡出土遺物実測図 (S=1:5)
 (『松江市史』史料編3「考古資料」「寺の前遺跡」より転載)

(1) 的場遺跡 (八幡町)

的場遺跡は、中海に近い低丘陵に位置し、3基の中世墓が発見されている。1基は平安時代末から鎌倉時代にかけての火葬墓で、中国製の褐釉陶器の壺が骨蔵器に使用されていた。他の2基は土葬墓で、細長い穴に葬られていた。副葬品がないため、埋葬時期は分からない。

(2) 中竹矢遺跡 (竹矢町)

中竹矢遺跡は国分尼寺跡の背後の丘陵に位置し、中世墓が1基発見されている。一辺1m四方の小さな墓穴の底部より、小児の火葬骨と角釘が出土したが、副葬品は残っていなかった。埋葬時期は炭素14年代測定により14世紀代と推定されている。なお、前述した遺跡がのる丘陵では、室町時代以降も墓地として使用が続けられた。中竹矢遺跡と同じ丘陵にある社日遺跡では、室町時代前半の火葬墓が見つまっている。地元石材で造られた五輪塔が5基以上建てられていた。(島根県教育委員会 2000)

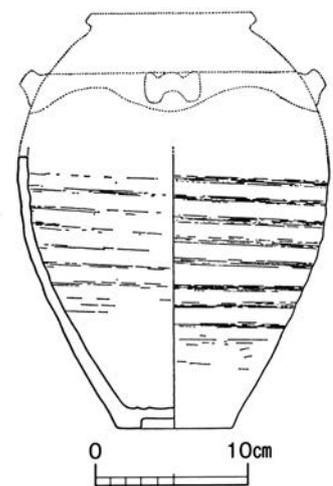


図 20 的場遺跡出土褐釉四耳壺実測図 (S=1:5)
 (『松江市史』史料編3「考古資料」「的場遺跡」より転載)

(3) 小無田II遺跡 (大庭町)

小無田II遺跡は茶臼山の南西麓の台地上に所在する。土壇墓2基(SX01, 02)が接近して発見されており、埋土を同じくすることから同時のものと考えられる。SX01は、平面形が隅丸長方形であり、大きさは長さ1.4m、幅0.5mである。副葬品としては、土壇内から土師器碗、皿、鉄製紡錘車出土している。SX02も隅丸長方形で、大きさは長さ1.75m、幅0.75mである。副葬品としては、土壇内から土師器碗、皿、刀子、鉄釘が出土している。土師器碗の形態から12世紀代の墓と推定される。

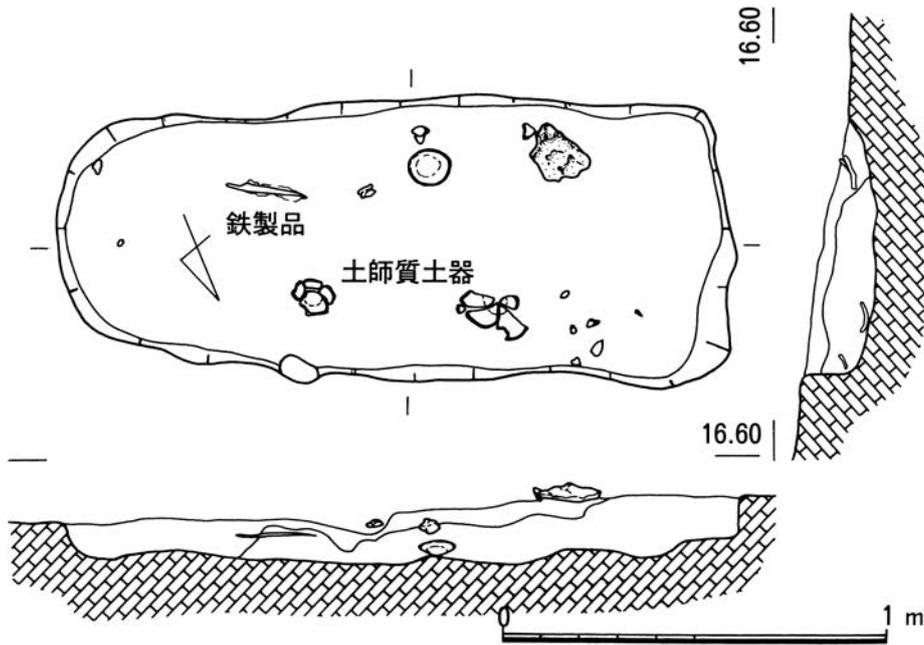


図 21 小無田Ⅱ遺跡 SX-02 遺構実測図
 (『松江市文化財調査報告書 第75集』「小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報」第24図より転載)

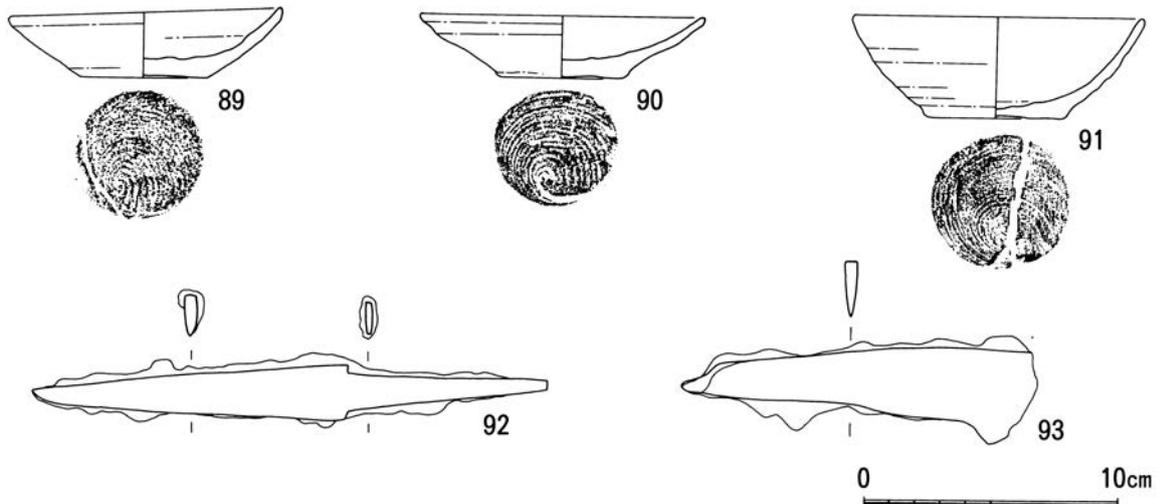


図 22 小無田Ⅱ遺跡 SX-02・03 出土遺物実測図
 (『松江市文化財調査報告書 第75集』「小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報」第25図より転載)

4. 祭祀にかかわる遺跡

乃木長廻遺跡 (上乃木)

府中の周辺部にあたる上乃木の台地上に乃木長廻遺跡がある。台地の東向き斜面で、径1m程の穴が見つかり、底部には13世紀の土師器碗と皿がびっしりと敷き詰められていた。土器は72枚あり、轆轤で成形されたものではなく、手捏ねの土器である。また、その上に素焼きの土鍋1個載せられていた。この鍋の底部には煤が付着しており、穀物を煮て、碗や皿に盛ったものと推定される。さらに、この穴の底部の中央がさらに丸く掘り下げており、その中に中国製褐釉陶器の四耳壺1個が置かれていた。壺の口は石で塞がっていたため、内部は空洞であった。しかし、遺物は何も残っていなかった。山陰においては、建築時の地鎮めに、鉄鍋と土師器皿がセットで埋められたことが知られている。他の地方では、土鍋が使用されることが多く、これらの遺物も出雲府中付近に住む有力者の屋敷での地鎮時に使用

されたものと思われる。なお、土師器碗・皿は京都を中心とした畿内で流行していたものがある。中世前半期の手捏ね土器は、出雲部では出雲国府跡や石台遺跡など出雲府中周辺の数遺跡で僅かばかりしか出土してなく、これほどまとめて発見されたのは珍しい。京都の土器を真似たもので、地元で焼かれた土器と推定される。

5. まとめ

これまでに、出雲府中に関連する遺跡について、発掘調査成果を基に、かつ、出土品の一部の再整理も含めて記述してきた。しかし、発掘面積が限られたものであり、さらに遺跡数も少なく、十分な情報を得ていないが、考古資料から見える出雲府中の概観はある程度に示せたものと考えられる。以下、出雲府中の特徴を若干述べてまとめたい。

まず、遺跡の分布をみてみよう。前述したように、青磁、白磁や国産陶器がまとめて出土し、出雲府中にかかわる遺跡は意宇川下流域から茶臼山北麓一帯に点在している。これは古代の国府域に比べ、かなりの広範囲となっている。一方、意宇川河口付近や東出雲町出雲郷については、発掘調査がほとんど無く、現時点では、東や北側については明確に把握できていない。また、文献史料にみえる八幡津や平浜八幡の神宮寺等の寺院跡についても、地名等では場所が知れるものもあるが、遺跡上からはその実態は不明といわざるを得ない。今後の調査に待ちたい。

次に、各遺跡の性格については、館や屋敷地にかかるものが多い。規模の大きい出雲国府跡や出雲国造館跡は、意宇平野の微高地とその周辺部の台地上に位置する。これらの場所は、古くから集落や役所等に利用されてきた所でもある。

遺構としては、溝や掘立柱建物跡が確認され、さらに出土する貿易陶磁等から国司や在庁官人の屋敷跡と推定される。中でも、出雲国府跡から大屋敷遺跡にかけての一带は、複数の区画（屋敷地等）が存在していたと考えられ、多くの柱穴群や複数の井戸跡が発見されている。この地は古代から主要な場所であり、出雲府中においても中枢部に当たる。唯し、これまでに詳細な遺構の検討はされていないのであり、その作業は今後の課題といえる。なお、天満谷遺跡についても、今回再整理した出土品からも同様の性格をもつ遺跡といえる。狭い谷合を敷地に造成している点は他の遺跡では認められないことである。この地が前記した出雲国府跡に近いことが影響しての選地かと推定される。また、中竹矢遺跡のような丘陵の一角に位置し、小規模な屋敷地をもつ遺跡も存在する。今後、このような小規模遺跡で、建物も小規模で、出土品も少ない遺跡についても性格を明確にする必要がある。また、石台遺跡は、遺構は未検出であるが、川沿いに位置し、多くの貿易陶磁器が発見されている。大橋川から少し入った馬橋川の下流部にあたり、津的な性格を付随する遺跡が付近に存在すると推定される。

中世の社寺跡については、発掘調査がほとんどなく遺構等については不明である。ただし、寺の前遺跡から平安時代末の白磁等が出土しており、南新造院および四王寺との関連が考えられる。

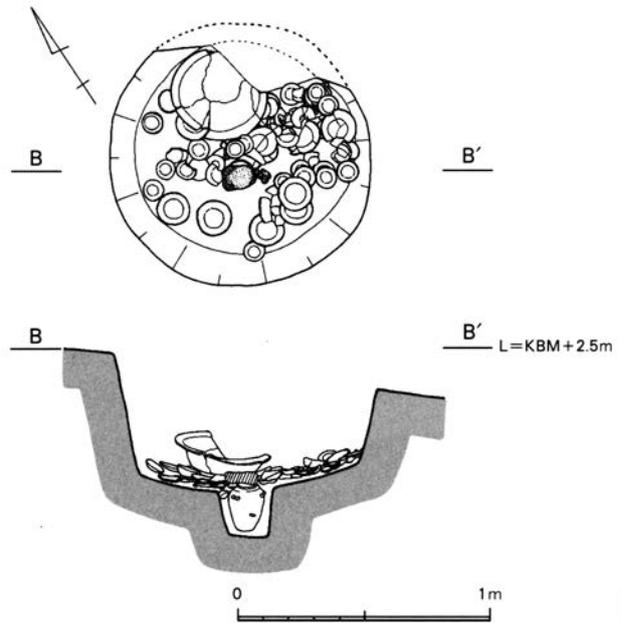


図 23 乃木西廻遺跡 SK01 遺物出土状況実測図
 (『埋蔵文化財課年報IX』「平成19年度調査概要報告乃木西廻遺跡」
 第5図より転載)

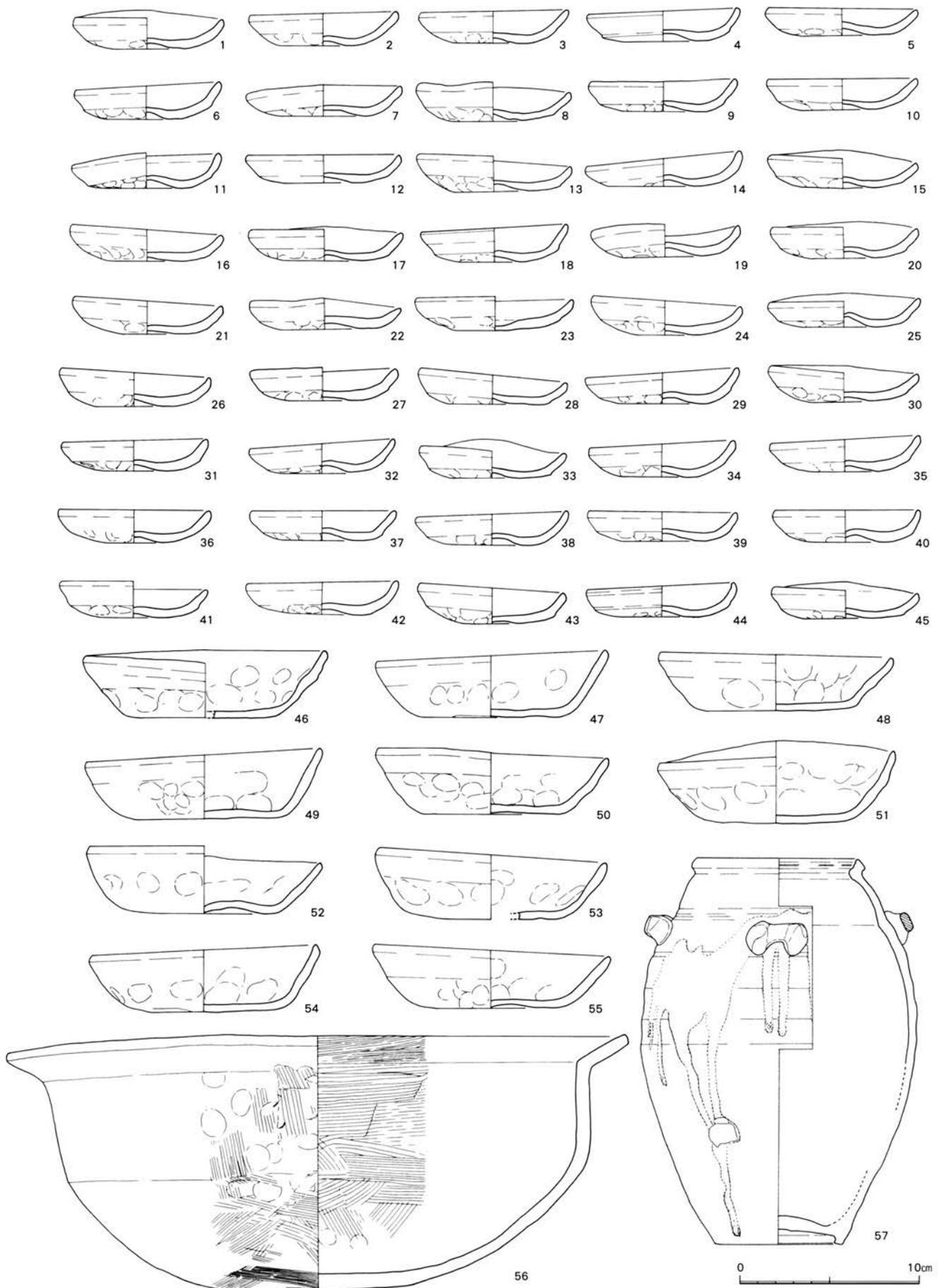


図 24 乃木西廻遺跡 SK01 出土遺物実測図
 (『埋蔵文化財課年報IX』「平成19年度調査概要報告乃木西廻遺跡」第5図より転載)

中世墓については、中海沿いの竹矢町などの丘陵に土壙墓や火葬墓があるが、発掘調査例が少なく、出雲府中との関連については言及できていない。出雲国内の墓との比較しつつ、今後の調査例の増加を待って論じたい。なお、14世紀以降においては、細粒凝灰岩の白粉石製五輪塔が造立され始める。出雲府中内にも、石塔が点在しており、これらの石塔の時期や造塔者の階層等も今後検討する必要がある。⁽¹⁰⁾

遺物の中で出土量の多いは土師器である。大部分は糸切底をもつ碗、皿であるが、手捏ねで成形された京都系土師器も出雲国府跡や石台遺跡、天満谷遺跡で少量出土している。一方、乃木長廻遺跡からは碗と皿が一括出土している。今後、前述の3遺跡のものと、形態や技法について詳細に検討する必要がある。陶磁器においては、貿易陶磁器の出土割合が異常に高い。出雲国府跡では総数5,319片、天満谷遺跡379片、出雲国造館跡203片、石台遺跡129片である。また、中国産白磁が大部分を占める。時期では、A期からG期にわたり、ほとんどが中世前期までの遺跡である。特に、C期とD期に集中している。⁽¹¹⁾ 出雲国府跡日岸田地区の場合、9割を超す。中でも、日岸田地区の堂田調査区では100㎡あたり327点と高い比率である。この調査区では広東系白磁や青白磁、中国産陶器盤・壺などの特殊品も混じり、前記したように「陶磁器のストックなどの場、蔵などの存在」が指摘されている。⁽¹²⁾ また、出雲国府跡では、出雲の他地域では出土がほとんどない常滑や備前の古いものも少量混じる。⁽¹³⁾ なお、山陰において同様に貿易陶磁の比率が高く、特殊品をもつ遺跡としては、石見府中の古市遺跡（浜田市上府町）が知られている。⁽¹⁴⁾

最後に、出雲府中の終焉期についてみてみたい。文献史料からは南北朝以降も、前述したように、八幡町や竹矢町の中海沿い地域を中心として、15世紀代までは存続していることが窺える。⁽¹⁵⁾ しかし、茶白山周辺部の発掘調査においては、出雲国府関連遺跡は出雲国府跡をはじめとして、G期の南北朝期まで存続したものが多い。室町時代まで継続する遺跡は今のところ存在しない。今後、中海沿岸部の竹矢地区や東出雲町出雲郷等において新たな中世遺跡が発見されることに期待したい。



写真1 出雲中世府中城
（『松江市史』史料編3「考古資料」口絵8より転載）

注

- (1) 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 - 史跡出雲国府跡 9 総括編一』 島根県教育委員会 2013
- (2) 井上寛司 1999 「出雲国府と中世出雲府中」 『季刊文化財』 92
- (3) 注 2 に同じ。
- (4) 廣江耕史・西尾克己 2012 「出雲中世府中関連遺跡」 『松江市史 考古資料』
- (5) 山本信夫・山本麻里子 2007 「山陰の出土貿易陶磁と傾向」 『下関市文化財調査報告書 25』
- (6) 注 1 に同じ。
- (7) 出雲国府跡、天満谷遺跡、乃木長廻遺跡、石台遺跡で出土している。
- (8) 西尾克己・高屋茂男 2009 「文献・考古資料からみた出雲国造館」 『八雲立つ風土記の丘』 197
- (9) 『一の谷中世墳墓群遺跡』 1993 磐田市教育委員会
- (10) 狭川真一 「松江の中世石塔訪問記」 2015 『松江市史研究 6』
- (11) 山本信夫 「中世前期の貿易陶磁」 『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 眞陽社 1995
- (12) 注 5 に同じ。
- (13) 出雲国内では青木遺跡（出雲市東林木町）で出土が知られている。（『国道 431 号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—青木遺跡—（中近世編）』 島根県教育委員会 2004）
- (14) 『伊甘土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報』 浜田市教育委員会 1995
榊原博英 「石見」 『中世府中』 山陰中世土器検討会 2014
- (15) 原慶三 「第 2 編歴史第 2 章中世」 『竹矢郷土史』 1989

発掘調査報告書

山本清 「松江・的場古墳群」 1971 『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 島根県教育委員会
松江市教育委員会 1983 『出雲国造館跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会 1986 『石台遺跡』
島根県教育委員会他 1987 『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会 1992 『中竹矢遺跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2003～2008 『出雲国府跡 1～6』
島根県教育委員会 2000 『社日古墳—一般国道 9 号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12』
松江市教育委員会 1995 『寺の前遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2008 「平成 19 年度調査概報報告—乃木長廻遺跡—」 『財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課年報Ⅸ—平成 18 年度—』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1997 『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』

< 付記 >

本稿執筆後、松江市まちづくり文化財課により八幡町浜分において浜分Ⅱ遺跡の試掘調査が行われた。以下は同課から教示頂いた内容である。

遺跡の場所は平浜八幡宮の東に位置する浜分集落内である。地表下約 2 m に、基盤層の砂層があり、この層に多量の木杭がランダムに打ち込まれていた。砂層と有機物層がラミナ状に堆積し、遺物包含層は砂層の上であり、中世前半期の土器、陶磁器、木製品がまとまって出土した。中世土師器には京都系土師器を含む椀、柱状高台、土鍋が、中世須恵器には外面に格子状叩きをもつ甕がある。陶磁器には、中国産の同安窯青磁皿、龍泉窯青磁碗が、国産のものには肩部に押印をもつ甍系陶磁甕が出土している。また、低湿地遺跡のため木製品の箸や下駄なども含まれる。遺物には、白磁が少なく、青磁が中心であり、遺物は鎌倉時代から南北朝にかけてのものと考えられる。

遺跡周辺部では、発掘調査が全くなく、浜分Ⅱ遺跡は中海湖岸の中世前半の津的性格を有す事例として貴重な資料を提供したといえる。

(にしお かつみ 大田市教育委員会石見銀山課)

(ひろえ こうじ 島根県教育庁埋蔵文化調査センター)